

◆連載

いま留萌むかし 第三十五話

●ルルモツペ場所の開設

ルルモツペ場所が開設されたのがいつか、正確な年代は古文獻に現われてこない。しかし、天塩場所が慶長年間（一五九六〜一六一四）に、宗谷場所が貞享年間（一六八四〜一六八七）に開設されていることを考えるにルルモツペ場所も慶長年間以前に開設されていたとするのが妥当であろう。

ここで、場所とはなにか解説しておきたい。江戸幕府が創設されて諸国の武將は自分の国を持つ大名となった。そして、この大名は何万石というふうにならなくつけられるようになる。しかし、蝦夷地を統治した松前藩では米ができず何万石というふうにならなくつけがでなかつた。それと同じに家臣たちへの給料も、本州の大名たちはお米で何石とか何俵何人扶ちというぐあいに決めていたが、松前藩では家臣に一定の地域でアイヌ

の人たちとの交易をさせ、その利益を給料がわりにしたのである。この家臣たちに与えた地域を場所といった。また、藩主自ら交易する場所もあった。そして、この制度を商場知行制といい、場所の交易権を得たものを知行主といった。知行場所の一つにルルモツペ場所があつたのである。

最初に開設された時の知行主が誰であつたかは不明であるが、寛永十一年（一六三四）に松前藩主慶広の第六子景広が知行主となつている。その後、松前藩士工藤家の世襲知行地となり、記録に残っているものは享保年間（一七一六〜一七三六）に工藤八郎左衛門が苦前場所を含め四艘の交易船を派遣したとある。しかし、この工藤家も茅部の漁民の強訴問題の不始末から知行地を没収され、その後ルルモツペは藩主直領となつた。

圏は詳らかではないが、天明年間（一七八一〜一七八八）にはレウケ（礼受）からオニシカ（鬼鹿）まで、文化年間（一八〇四〜一八一七）にはアフシラリ（留萌と増毛の境界）からヲタニコロ（力昼）まで、安政年間（一八五四〜一八五九）にはアフシラリからチャシウンナイ（茶俊内）までとなつており、現在の留萌市と小平町の範囲となつている。

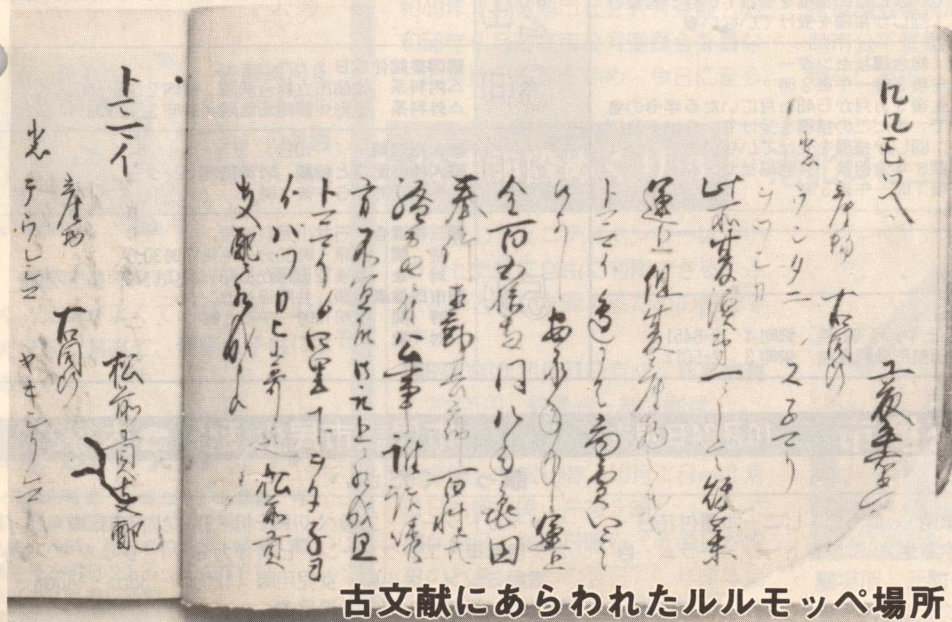
この場所の範囲はおそらく当時のアイヌの人たちの社会の範囲を踏襲したものらしく、ルルモツペにいたアイヌの人たちの有力者の勢力が及ぶ範囲が自然に場所の範囲として認知されたらしい。

天明年間のできごととして、松浦武四郎の西蝦夷日記に次のような話が載っている。

「天明の頃、増毛場所の支配人とルルモツペ場所の支配人が勝手に境界の杭をアフシ

ラアリから留萌川の所に移したところ、ルルモツペの村長イマウカシテというものが勝手に境界を移したことに抗議し、最初のアフシラリに移しかえさせた。」

ルルモツペ場所は今日でもその名残を留萌地方の南部圏として留めているといつてもよいであろう。



古文獻にあらわれたルルモツペ場所

広報
るもい
●特集 留萌はすみやすいですか

平成元年11月／発行・留萌市
編集・企画・振興室
印刷・株式会社 留萌新聞社

1989